

テキスト言語学の観点から見た 談話・テキスト研究概観⁽¹⁾

庵 功 雄

0. はじめに

伝統的な言語学（文法）研究における考察上の最大単位は長らく文だったが、ヨーロッパでは早くからそれに対するアンチテーゼとして談話・テキストの構造を研究対象とする言語学（テキスト言語学）の必要性が唱えられ、それに関する研究が盛んに行われている。

本稿では、「テキスト」を分析対象とする言語学の必要性を「テキスト言語学」と共有する立場に立ち、その観点から先行研究を概観する（なお、本稿では“text”に当たる語として「テキスト」を用いる。また、話し言葉を指す時には「談話」、書き言葉を指す時及び両者を総称する時には「テキスト」という語を用いる）。以下の記述には全体を通じて論者の主観的な理解及び能力不足に起因する誤解が数多いと思われるが、これに関しては諸賢の御寛恕を切に乞う次第である。なお、本文中敬称は省略する。

1. テキスト言語学／テキスト文法とは

「テキスト言語学」は「テキスト」を対象とする言語学の一分野である。テキストとは、「意味的にまとまりをなす文（連続）」のことであり、話し言葉におけるものも書き言葉におけるものもそれに含まれる。また、テキストは1文からなることもあるが、多くの場合2文以上から構成される（cf. Halliday & Hasan (1976: 1)）。

言語学が「テキスト」を避けてきたのは、テキストにおける（不）適格性が文までのレベルにおけるようには明確に定義できないと考えられてきたことによると思われる。

例えば、日本語の音素の配列として /botaN/ や /taboN/ は可能である（ただし、存在可能な配列が全て実際に語として存在するとは限らない）が、/Nbota/ は不可能であるということや、「太郎が怪我をした」は適格な語の配列からなる文であるが、「が太郎怪我をした」はそうではない、といったことは文脈を考慮せずに決定できるのに対し、同様の現象は文連続のレベルでは見られない（見られにくい）といったことが、テキストを言語学の研究対象とすることへの否定的な反応の原因であると考えられる（cf. 池上（1982））。

しかし、母語話者はテキストレベルでも文法能力（grammatical competence）も持っていると思われる現象が存在する。(1) (2) について考えてみよう。(1) と (2) の () には共に「ガ格名詞句」が入るが、それが主題化される（「は」の形を取る）か主題化されない（「が」の形を取る）かについて考えてみると、日本語母語話者なら、(1) の () には「が」を、(2) の () には「は」を入れると思われる（「は」と「が」を主題と非主題の対立と見る見方については野田尚史（1996）参照）。これが事実ならば、母語話者は文レベルだけではなく、テキストレベルにおいても一定の文法能力を持っていると考えられよう（この (1) (2) で観察される現象について詳しくは庵（1997b）を参照されたい）。

(1) 健はずっと病気知らずだった。その健 () 急病であっけなく逝ってしまった。

(2) 健はずっと病気知らずだった。その健 () 還暦祝いでの時も一升瓶を空けた。

本稿では、テキストレベルの問題の内、文法能力が関与する問題を扱う分野を「テキスト文法 (text grammar)」, それを含むテキストに関する問題全体を扱う分野を「テキスト言語学 (text linguistics)」と呼ぶ。本稿の見方によるテキスト文法の規定は以下の通りである。なお、ここでの「文法」と「運用論 (pragmatics)」の区別は基本的に Leech (1983) に倣ったものである⁽²⁾。

(1) テキスト文法はテキストレベルでしか解決できない文法的現象を取り扱う分野であり、テキスト言語学の中心的位置を占める。ここで言う「文法」は「母語話者が持つ一般化が可能な規則 (rule) の総体」を意味し、「適切な言語運用のために必要とされる原理 (principle) の総体」を扱う「運用論」とは区別される。

2. 国内の初期の研究とテキスト言語学／テキスト文法

本節では、テキスト文法を (I) のように規定した場合にそれと対照できると思われる国内の研究を主に初期のものについて見ておくことにする。

2-1. 文章論的研究

テキスト文法を (I) のように規定した時、国内の研究で最も近いのは「文章論」である。

「文章論」は時枝 (1950) によって唱えられたが、時枝自身はその具体的な定式化を明確に行わなかった (cf. 南 (1995), 永野 (1986)) ため、文章論は実際は永野 (1986), 市川 (1978), 林 (1973) などによって具体化されたと言ってもよい。この内、テキスト言語学と対照可能な意味での文章論を構築しているという点から、ここではまず永野 (1986) と林 (1973) を取り上げ、次に後者との関連から長田 (1984) についても述べる。

2-1-1. 永野 (1986) —文法論的文章論—

まず、永野 (1986) をとりあげる。永野の考える文章論は「文法論的文章論」であり、それはより広義の、文学理解などを主目的とする「(一般的) 文章研究」とは区別される。永野 (1986) には「文章論」を「語論」「文論」と対等なものとして捉えようとする姿勢がある。この考え方には、「テキスト」の中に法則性を見いだそうとする、テキスト言語学と共通するものが確かに見られる。しかし、永野の言う「文法論的文章論」と「テキスト言語学」の間には相違点も見られる。次に両者の共通点と相違点を簡単に見ておく。

両者の最大の共通点は、テキストの構造を「言語形式という形態的指標」(永野 (1986)) に基づいて究明しようとする点にある。およそ「文法」というものは表層に現れた要素 (若干逆説的な言い方になるが、所謂「省略」された要素もそれが言語的に回復可能である限り、表層に現れたものと同等の性質を持つ) のみを分析の手がかりとすべきであるから、こうした永野の「文法論的文章論」の方法論は妥当なものであると言えよう。

しかし、両者には相違点もある。その最大のものは、「文章論」が書きことばとしての「文章」と話しことばとしての「談話」を完全に別のものとして考えていることに

ある。確かにテキスト言語学においても話しことばを対象とする「談話分析 (discourse analysis) / 会話分析 (conversational analysis)」は、書きことばの分析とは別の分野と考えられがちであるが、それはあくまで方法論上の便宜によるものであって、書きことばと話しことばの間には本質的な違いはないというのがテキスト言語学の基本的な立場である。このことは例えば、「(テキストとは) 話されたものであるか書かれたものであるかの違いや、長さの違いによらず、統一体をなすものの総称である」という Halliday & Hasan (1976: 1) の言明に端的に現れている。このように、話しことばと書きことばは別の原理に支配されるものと考えられるのではなく、Ochs (1979) が言うような「被計画性 (plannedness)」の違いといった観点から連続的に捉えるべきものであると考えられる。この点において、永野や市川などの唱える文章論的研究とテキスト言語学の間には相違点が認められる。

2-1-2. 林 (1973) ー日本のテキスト言語学の出発点ー

次に林 (1973) を取り上げる。同書は小学校2年生の教科書に現れる全ての文をサンプルにして、テキスト(「文章」)の中で文の呼応を問題とする「起こし文型」について考察し、それを「始発型」「承前型」「転換型」(及び「自由型」)に分けて詳説したものである。

この研究の第一の価値は、日本語のテキストを構成する要素を網羅しそれに考察を加えたということにある。これは基本的精神において Halliday & Hasan (1976) と共通するものであるが、それに先行する時期に発表されたものであり、その点でも日本のテキスト言語学の嚆矢と言うべき極めて重要な研究であると言える。

この研究の第二の価値は、「承前型」の分析において、テキストにつながりをもたらしものとして、「記号 (agent)」と「要素 (element)」を区別している点にある。これによって、接続詞や指示詞のように語の文法的性質として文をつなぐ能力を持つもの(承前記号)だけでなく、テキストの中で繰り返された要素や、動詞の必須項の中で省略された要素などが(その解釈をテキスト内の他の部分に依存することによって)テキストにつながりをもたらししているということが明らかになった(林のこうした指摘をテキスト言語学の理論的枠組みとの関連から捉えたものに庵 (1998) がある)。

2-1-3. 長田 (1984) ー連文的職能の探求ー

林 (1973) との関連でとりあげる必要がある研究に長田 (1984) がある。同書は文と文が繋がって構成される「連文」を研究対象とし、連文を連文たらしめている機能を「連文的職能」と呼び、その具体的な解明に力を注いでいる。

長田の言う連文的職能とは例えば次のようなものである。

(3) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。(川端康成「雪国」。長田(1984:88)より)

(4) 信号所では乗客の乗降は取り扱わない。

(3)の「信号所」は辞書項目(lexical entry)ではなく、(4)のような総称文におけるような抽象化されたものでもなく、「国境の長いトンネルを抜けたところにある信号所」という具体的に限定されたものである。このように名詞が文中で限定され、そのことによって文と文の間につながりをもたらされるのは、名詞が「素材表示部の意義」だけを持ち、「関係構成部の意義」を持たない語類であることによる。

長田の研究対象である連文的職能を最も典型的に担うのは指示詞であり、その意味で長田が指示詞の機能を、「(指示語によって)限定される語即ち被限定語を個別的表現の極限に近づけるのに必要にして十分な内容を、自らの位置に持ち込み、持ち込むことによって被限定語を限定し、それによって被限定語を個別的表現の極限に近づける力を持っている」(長田(1984:29))と規定したことは重要である。この点を具体的に見てみよう。

(5) 元文元年の秋、新七の船は、出羽の国秋田から米を積んで出帆した。その船が不幸にも航海中に風波の難にあつて、半難破船の姿になって、積荷の半分以上を流失した。(森鷗外「最後の一句」。長田(1984:31)より)

この例の「その船」は単独では指示対象を持たないが、その指示対象は先行文脈内の単なる「船」ではなく、長田が指摘するように、「元文元年の秋、出羽の国秋田から米を積んで出帆した新七の船」であり、「その」という指示詞(長田は「持ち込み詞」と呼ぶ)の機能はこの下線部の情報を当該文に「持ち込む」ことにある(この長田の研究を承け、文脈指示における「この」と「その」の機能上の差異を論じたものに庵(1995a)がある)。

2-1-4. 文章論的研究の特徴

上では、文章論的研究をテキスト文法との対比という点で論じたが、ここで、これらの研究に共通する特徴についてまとめておきたい。

永野、市川、林、長田らの研究に共通する特徴は、豊富な実例をもとに考察をしているということと、文章全体の構造化という大局的な問題が扱われているということである。このことの長所はこれらの研究が国語教育や日本語教育に応用しやすいという点であるが、観察された現象の一般化という観点が不十分であるという問題点も含

んでいる。

2-2. 久野 (1973, 1978etc.) —談話の文法—

テキストレベルの現象に関する国内の研究において欠かすことができないのが久野の一連の研究 (久野 (1973, 1978, 1983) など) である。

久野の研究は、生成文法的方法論及びプラグ学派の「機能的な文の見方 (functional sentence perspective, FSP)」の影響を受けて成立している。FSP は新情報・旧情報という概念を相対化したもので、テキスト内の新情報・旧情報の (無標の) 分布を旧→新という情報の流れで説明したものである (cf. Firbas (1964, 1992))。

久野の研究の中で FSP の影響が最も大きいのは久野 (1973) の「ハ」と「ガ」に関する議論及び久野 (1978) などの「省略」に関する議論である。久野は、前者に関しては「主文の主語に現れる「ガ」は、名詞句がその文の中で、新しいインフォメーション (即ち、文脈から予測することができないインフォメーション) を表すことをマークする標識である」(久野 (1973:210)) と述べ、後者に関しては「省略は、重要度の低いインフォメーションを表す要素から、重要度の、より高いインフォメーションを表す要素へと、順に行なう。すなわち、より重要なインフォメーションを表す要素を省略して、重要度のより低いインフォメーションを表す要素を残すことはできない」(久野 (1983:117)) と述べている。

このように、久野の研究は「は」と「が」や省略といった現象が情報の新旧という一般性の高い原理によって説明され得るということを示した点で高く評価できるものである⁽³⁾が、問題点も存在する。その最大のもは、その研究の射程が「談話」の中の極めて形式文法に近い部分に限られているという点にある。実際、久野が「談話の文法」の一部としてとりあげる「視点」という概念は、西山・上林 (1985) が指摘しているように文文法レベルの問題であるとも考えられるし、西山 (1979)、西山・上林 (1985) の議論が正しいとすれば、上述の「は」と「が」や省略に関する議論も文文法 (形式文法) と運用論の組み合わせで説明できることになり、久野の研究を「談話の文法」と呼ぶ必要はなくなる。

このように、久野の研究は必ずしも「談話の文法」と呼べない可能性があるが、このことは久野の研究の価値を損なうものでも、「談話の文法 (テキスト文法)」の存在を否定するものでもない。前者について言えば、たとえそれが談話の文法ではなくても、久野が問題としている点は依然として「省略」について考える際の必要条件である。一方、後者について言えば、(1) (2) で見たような問題や指示詞に関する問題等

は連文によって構築される言語的文脈を考察することなしには解決できないものである。いづれにせよ「テキスト文法」というものを設定する必要があることに変わりはない。

3. 海外の理論

本節では日本のテキスト言語学に重要な影響を与えた、ないし、日本のテキスト言語学が参考とすべきであると考えられる海外の文献のいくつかをとりあげる。

3-1. de Beaugrande & Dressler (1981) —テキスト言語学の理論的枠組み—

最初にとりあげるのは、de Beaugrande & Dressler (1981) である。この文献は、テキスト性 (textuality, テキストをテキストたらしめる性質) を構成する要因を7つとりあげ、その各々を検討している。

このように、テキスト性という概念を具体的に捉えるための枠組みを示した点もこの文献の価値であるが、それ以上に重要なのは、テキストを、言語的知識という「潜在的体系 (virtual system)」から具体的な選択が行われてできる「実現的体系 (actual system)」として捉えている点である。つまり、テキストは (文以下のレベルの) 文法体系のような実時間に制限されない体系ではなく、実時間内で様々なレベルでの選択を同時に行って形成していかなければならないものなのである。こうしたことが可能になるためには、テキスト解読者 (decoder) はテキストの解釈に際して、「デフォルト (default)」の選択肢を持っていなければならない。デフォルトとは、「その反対の指定がなされない限り前提とされる」(de Beaugrande & Dressler (1981: 34)) 選択肢である。テキスト送信者 (encoder) とテキスト解読者はこうしたテキスト解読ストラテジーを共有することによって、実時間内で容易にテキスト解読を行っていると考えられるのである。

3-2. Halliday & Hasan (1976) —結束性の研究—

文連続が単なる文の羅列ではなく全体で一つの意味的まとまりをなす時、それを「テキスト」と言う。この時、文連続に意味的まとまりを与えるもの (の中の最も重要な一つ) を「結束性 (cohesion)」と呼ぶが、西洋言語学においてこの結束性を研究対象とした記述を初めて行ったのが、Halliday & Hasan (1976) (以下、H&H と略称) である。

結束性とは、同書の定義によれば、「ある要素がその解釈を他の部分に依存し、そのことによって文連続をテキストたらしめること」(H&H: 4)である。例えば、(6) b は単独では存在し得ない文である。なぜなら、単独の文として考えた場合には“them”の指示対象が決められないからである((6)はH&H: 2より)。

(6) (a) Wash and core six cooking apples. (b) Put them into a fireproof dish.

即ちこの場合、(6) b は“them”の解釈を他の部分(言語的文脈。この場合は(6) a)に依存することによって、(6) a と一体化して全体で一つのテキストを構成しているのである。

テキスト言語学の理論におけるこの文献の価値は次のような点に見いだされる。

第一は、「テキスト内指示(endophora)」と「テキスト外指示(exophora)」とを区別し、「テキスト外指示は結束的ではない」(H&H: 18)としてその機能の違いを明確にした点である。テキスト内指示は照応が言語的文脈内で完結するもので、テキスト外指示は照応が言語的文脈内では完結しないものである。例えば相手が手にした本を指さして(7)を発することは可能だが、その時(7)が他の文を「引きつけて」一体となるということはない。

(7) その本は面白かった。

これに対し、(8)の「その本」は先行文脈で言及されている「本」(より厳密には「先日生協で買って読んだ本」と同一物指示にならなければならない)と、そのことによって、この2文がテキストになることに貢献している。

(8) 先日生協で本を買って読んだ。その本は面白かった。

なお、第一の点に関連して、「1, 2人称は本質的にテキスト外指示的であり、3人称はテキスト内指示的である」(H&H: 48)という指摘も重要である。これは、1, 2人称は「話し手」「聞き手」という発話役割(speech role)を指すのに対し、3人称は特定の個体を指すということに基づいている(1, 2人称と3人称とのこの区別は基本的に、Benveniste (1966)の言う「人称」と「非=人称」の区別に対応する)。このことから例えば、“I saw a boy at the park.”, “Did you see a boy at the park?”等は談話の初めでも使えるのに対し、“He saw a boy at the park.”などはそうではない(もし使えば、“Who saw?”などの疑問文を誘発する)といったことが説明できる。また、日本語についても、「公園で男の子を見ましたよ」「公園で男の子を見ましたか」は(1, 2人称の代名詞が「省略」されているにもかかわらず)談話の初めで使えるのに対し、「公園で男の子を見たそうです」はそうではなく、「えっ、誰が?」といった

疑問を誘発するといった現象が見られる。

H&Hの第二の功績は、照応の中に「指示 (reference)」と「代用 (substitution)」という二つの異なるタイプのものを見出したということである。これについては、紙幅の関係で詳しくは述べられないので、英語に関しては安井・中村 (1984) を、日本語に関しては庵 (1996) を参照していただきたい。

ここまで H&H の功績について述べたが、この研究にも問題点が多い。その最大のもは、テキストの形成に際して、語彙・文法的な手段である「結束性」しか考慮していないということである。実際には、(9) のように、表層には何ら結束性に関わる要素が存在しない文連鎖がテキストになっていることも多い。つまり、テキストの構成に関わるものには、Widdowson (1978) 等が言うように、「結束性」だけではなく、「一貫性 (coherence)」といったレベルのものも存在するのである⁽⁴⁾。

(9) A: 電話だよ。

B: 俺、今風呂に入ってんだ。

A: 分かった。(Widdowson (1978) より)

3-3. Givón (ed. 1983) —主題連続—

最後にとりあげるのは Givón の研究である。Givón はいくつかの文献においてテキストについて論じているが、その中で特に重要な概念が「主題連続 (topic continuity)」である (cf. Givón (ed. 1983))。主題連続とは、テキストの中である文の主題 (topic) がどのように、保持されたり切り替わったりするのかということであり、それを究明することによって、テキストの構造がより明らかになると考えられる (日本語におけるこの分野の研究には畠 (1980)、砂川 (1990, 1995)、清水 (1995, 1997) などがある)。

4. 最近の国内の研究

本節では、2 節、3 節で概観したような方法論を観点として、80 年代後半からの国内の研究を見ていくが、ここでは便宜上、話しことば (談話) を主たる考察対象としている研究と、書きことば (テキスト) を主たる対象とする研究に分けて記述することにする。

4-1. 談話の研究

談話の研究は、談話管理理論に基づくもの、接続表現に関するもの、会話の構造に関するもの、の三つに大別できる。以下、この順に論じていく。

4-1-1. 談話管理理論に基づくもの

まず、田窪 (1989, 1990, 1992), 金水 (1992), 金水・田窪 (1990, 1992), 田窪・金水 (1996) など論じられている、「談話管理理論」に基づく研究をとりあげる。

談話では話し手、聞き手が持つ知識は刻々と変化する。談話は話し手と聞き手が話の内容に関する知識を常に管理しながら進めていく共同作業として捉えられる。談話管理理論はこうした、談話における話し手、聞き手による知識の管理のあり方を捉えようとする理論で、Fauconnier (1984) のメンタルスペース理論を参考に構築されている。この理論によって説明される現象には様々なものがあるが、ここでは指示詞のア系統とソ系統の差異 (cf. 金水・田窪 (1990, 1992), 田窪・金水 (1996)) についてのみ言及する。

指示詞の文脈指示用法におけるア系統とソ系統の違いについては久野 (1973) が (10) (11) などの例に基づいて考察を行って以来、黒田 (1979), Yoshimoto (1986), 金水・田窪 (1990) など盛んに論じられた (指示詞の研究史については金水・田窪 (1992) 参照) が、田窪・金水 (1996) の次のような一般化によって一定の解決を見たと言える⁽⁶⁾。

(10) A: 昨日、山田さんに会いました。あの (/*その) 人、いつも元気ですね。

B: 本当にそうですね。

(11) A: 昨日、山田さんという人に会いました。その (/*あの) 人道に迷っていたので助けてあげました。

B: その (/*あの) 人、ひげを生やした中年の人でしょ。

(12) a. ア系統は話し手の直接経験領域にある要素を指す。

b. ソ系統は話し手の間接経験領域にある要素を指す。

このように説明することで、(10) (11) のような場合だけでなく、仮定的な場合 (e. g. (13)) や相手の発話によって導入された要素 (e. g. (14)) などが一貫してソ系統でしか指されないことが説明できる。

(13) もし、特急が止まっていたら、それ/*あれに乗ろう。

(14) A: 昨日、山田さんに会ったよ。

B: その/*あの人, 誰?

4-1-2. 接続表現に関する研究

次に、談話を考える上で重要なものの一つである接続表現について考える。「接続表現」という表現は品詞論的な用語である「接続詞」より広い範囲の形式を含めたもので、具体的には、所謂接続詞の他に「話は変わりますが」「ということで」等も含まれる。

初期の接続表現の研究は統語的分類や用法的分類が中心で、その分析は静的な性質が強かったと言える。また、書きことば（テキスト）の用法を中心としているのも特徴的である。

一方、1980年代後半から談話／テキストの構造の解明という観点からの接続表現研究が盛んになってきた。この立場の重要な特徴に研究対象が話しことば（談話）に移ったということがある。こうした路線上に位置づけられる研究に蓮沼（1991）、浜田（1991, 1993, 1995a, 1995b）、メイナード（1993）、川越（1995）などがあるが、ここでは浜田（1991）を取り上げる。

浜田（1991）は「デハ系接続語（(ソレ) デハ, (ソレ) ナラ, (ソレ) ダッターラ, (ダト) スルトなどを含む。以下、デハ）」の特徴を新規情報の取り入れと規定し、デハが推論過程を持つことを明らかにしている。これから例えば (15) A2 はよいのに (16) A は不自然になる理由が分かる。なぜなら、(16) A は (i) の段階で既に当該の情報（桃子たちがいつごろ来るのか）についての意見を持っており（i.e. 当該情報は既知となっており）、(ii) の段階で (i) を入力として推論する必要がないからである（(15) - (17) は浜田（1991）より）。

(15) A1: 何時ごろ来るかしら、桃子さんたち…

B: お昼からって言ってたから、3時頃からじゃないか…

A2: じゃ, 急いで行って来るわ。

(16) B: 何時ごろ来るかなあ、桃子たち…

A: (i) お昼からって言ってたから、3時頃からじゃないかしら… (ii) *じゃ, 急いで行って来るわ。((15) A2 と同じ用法としては不適格)

また次のような現象もある。即ち (17) A への答えとして B1 はよいが B2 は不自然である。

(17) A: すみませんが、少々お待ちいただけますか。

B1: じゃ, また出直します。

B2: *じゃ, はい。

これは次のように説明できる。(17)の場合, デハには推論過程があるので[相手が待ってくれと言っている] → [(なぜかという) 忙しいからだろう] → [(忙しいなら) 出直した方がよい]などの推論過程が経た発話として解釈できるB1はよいが, そうした推論過程が読みとれないB2は不適格になるのである。浜田の研究には浜田(1993, 1995a, 1995b)などもあるが, いずれも接続表現を通して談話の構造の解明を目指すもので極めて興味深い。

4-1-3. 談話の構造に関する研究⁽⁶⁾

談話に関する三つ目のタイプとして挙げるのは, 談話の構造に関する研究である。これは所謂会話分析に当たる。そうした会話分析の例としてここではメイナード(1993)をとりあげる。これは日本語で書かれた「会話分析」の本としては初めてのものであり, 調査法や方法論について傾聴すべき議論がなされている。ただし問題点も指摘できる。

最大の問題点は, ここで扱われている現象が果して「会話分析」によらなければ明らかにできないものなのかということである。例えば, 同書で扱われている, 「よ」と「ね」の違いや「だって」の分析には「書かれた談話(シナリオなど)」から用例を得た研究との違いがあまり感じられない。同書で強調されているように, 一般に会話分析ではデータ収集が非常に難しく, それだけ「コスト」がかかる。そうである以上, そこから得るデータは「自然談話を分析しなければ得られない」ものである必要があると思うのである。

4-2. テキストの構造に関わるもの—結束性を中心に—

4-1では談話(話しことば)に関する研究をとりあげた。ここではテキスト(書きことば)に関する研究を主に「結束性」という観点から概観してみたい。

結束性とは, 文法的な装置によって文連続が一つの意味的まとまりを持つテキストをなす時にテキストが持つ性質である。この「文法的な装置」のことを結束装置(cohesive device)と言う。結束装置については前述の林(1973)に優れた記述が見られるが, 最近では, 「省略」に関する, 畠(1980), 砂川(1990), 清水(1995, 1997), 甲斐(1995)などの研究や, 「名詞」に関する仁田(1977, 1998), 庵(1995)などの研究がある。さらに, テンス・アスペクト形式がテキスト内で持つ, 「タクシス」と呼ばれる機能について詳論した工藤(1995)の研究もテキストの構造を考える

上で極めて重要である。

5. 今後の課題

本節では、テキスト文法／テキスト言語学が今後向かうべき方向性についての私見を述べて全体の結びとしたい。

論者は先に、テキスト方法とテキスト言語学の関係を (I) のように規定した。

- (I) テキスト文法はテキストレベルでしか解決できない文法的現象を取り扱う分野であり、テキスト言語学の中心的位置を占める。ここで言う「文法」は「母語話者持つ一般化が可能な規則 (rule) の総体」を意味し、「適切な言語運用のために必要とされる原理 (principle) の総体」を扱う「運用論」とは区別される。

つまり、「テキスト文法」は (重要なものではあるが) 「テキスト言語学」の部分となすにすぎないと考えるのである。では、「テキスト言語学」とは何を扱うものなのであろうか。論者はそれについて次のように考えている。

- (II) テキスト言語学は、実時間内という制限された条件下で人間が行っているテキスト処理の過程の解明を主目的とする学問分野である。

3-1 で de Beaugrande & Dressler (1981) について論じた際、言語知識は「潜在的体系」であるのに対し、テキストは「実現的体系」であると述べた。これは換言すれば、文文法は時間の制約と独立に研究してもよいが、テキスト言語学においてはそれだけでは不十分で、極めて短時間で言語処理が可能であるのはなぜかという問いに答える必要があるということである。こうした問題意識から見た時、極めて示唆的なのが寺村 (1987) である。

寺村は、次の (18) を「その先生は」「その先生は私に」というように順に提示していき、そのたびにその後を続けて文を完成させるという実験を行っている。

- (18) その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けて貰えと勧める人であった。(夏目漱石「こころ」)

その結果、「その先生は」の段階では極めて多様であった予測の範囲が、「その先生は私に」の段階で既に「言う」類「くれる」類の動詞の過去形で終わる」という形に収斂していることが分かった。この結果は極めて示唆に富む。

文文法の世界では殆ど問題にされることはないが、人間の実際の言語処理を考えた場合、「文」という単位の同定は決して簡単なものではない。特に、話しことばでは文

がどこで終わるかは厳密には予見できない。従って、構文解析は入力された要素を対象に線条的に行わざるを得ないため失敗も起り得る（文文法でこうしたことが問題にならないのは、書かれたものであるか否かに関わらず、言語形式が「文」という単位で提示されることが前提とされているためである）。もしこの失敗が度重なるようだとコミュニケーションは著しく阻害されるが、実際にはそうしたことは殆どない。これは、母語話者が次にどのような要素が現れるかということについて（経験的に）高い予測能力を持っているためである。この予測能力について考える場合に重要な役割を果たすと考えられるのは動詞の結合価である。実際、動詞が決まればその動詞がとる項の予測される範囲は必ず小さくなる（しかも、多くの言語において主語は述語に先行するから予測可能性はより高まる）。ただし、これを文字通りに取ると、SVO型の言語の方がSOV型の言語よりも処理効率がよいということになってしまう。しかし実際は柴谷（1981）が指摘するように世界の言語で最も多いのはSOV型である。ということは、動詞が最後に現れるということが実際の談話処理の障害となっていないはずである。寺村（1987）が示唆しているのはこの事実である。なお、こうした予測に関する最新の研究については石黒（1998）などを参照されたい。

問題とすべき対象はまだ多いと思われるが、本稿の記述は以上で終わることにする。

付記 1999年6月6日徳川宗賢先生が急逝された。論者は先生から一方ならぬ学恩を賜ったが、本稿の基となった庵（1997a）の執筆を勧めていただいたこともその一つである。拙いものではあるが、本稿を先生に捧げさせていただきたいと思う。

注

1. 本稿は庵（1997a）の内容にその後の展開を若干加えて修正したものである。なお、紙幅の関係で本稿で取り上げられなかった部分については庵（1997a）を参照されたい。
2. テキスト言語学に対する論者の理論的立場については庵（1998）を参照されたい。
3. 久野の談話文法に関しては高見健一の研究（高見（1995, 1998）など）も参照されたい。
4. 結束性と一貫性の関係に関する諸説についてはStoddard（1991）などを参照されたい。
5. ただし、こうしたアプローチは文章における指示詞の扱いには不向きである。この点について詳しくは庵（1994）を参照されたい。
6. 談話に関する諸現象を扱った最新の優れた研究に橋内（1999）がある。

参考文献（紙幅の関係上副題は省略する）

- 庵 功雄 (1994) 「結束性の観点から見た文脈指示」『日本学報』13 大阪大学
 —— (1995a) 「テキスト的意味の付与について」『日本学報』14 大阪大学
 —— (1995b) 「語彙的意味に基づく結束性について」『現代日本語研究』2 大阪大学
 —— (1996) 「指示と代用」『現代日本語研究』3 大阪大学
 —— (1997a) 「国語学・日本語学におけるテキスト研究」『言語とコミュニケーションに関する研究概観』平成8年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書
 —— (1997b) 「「は」と「が」の選択に関わる一要因」『国語学』188
 —— (1998) 「テキスト言語学の理論的枠組みについての一考察」『一橋大学留学生センター紀要』創刊号一橋大学
- 池上嘉彦 (1982) 「テキストとテキストの構造」『日本語教育指導参考書 11 談話の教育と研究 I』国立国語研究所
- 石黒 圭 (1998) 「理由の予測」『日本語教育』96
- 市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 甲斐ますみ (1995) 「省略のメカニズム」『岡山大学留学生センター紀要』3 岡山大学
- 川越奈穂子 (1995) 「ところで、話は変わるけど」仁田編 (1995) 所収
- 金水 敏 (1992) 「談話管理理論から見た「だろう」」『神戸大学文学部紀要』19 神戸大学
- 金水 敏・田窪行則 (1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3 講談社サイエンティフィック
 —— (1992) 「日本語指示詞研究史から／へ」金水・田窪編 (1992) 所収
 —— 編 (1992) 『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
 —— (1978) 『談話の文法』大修館書店
 —— (1983) 『新日本文法研究』大修館書店
- 黒田成幸 (1979) 「(コ)・ソ・アについて」『英語と日本語と』くろしお出版
- ザトラウスキー=ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析』くろしお出版
- 柴谷方良 (1981) 「日本語は特異な言語か」『月刊言語』10—12
- 清水佳子 (1995) 「主題の省略と顕現から見た文連鎖の型」『待兼山論叢』29 大阪大学
 —— (1997) 「主題の連鎖と「のだ」との関連」『現代日本語研究』4 大阪大学
- 霜崎 実 (1981) 「「ノデアル」考」*Sophia Linguistica*. 7 上智大学
- 砂川有里子 (1990) 「主題の省略と非省略」『文藝言語研究 (言語篇)』18 筑波大学
 —— (1995) 「日本語における分裂文の機能と語順の原理」仁田編 (1995) 所収
- 高見健一 (1995) 『機能的構文論による日英語比較』くろしお出版
 —— (1998) 「情報構造と伝達機能」『日英語比較選書 2 談話と情報構造』研究社出版
- 田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」『日本語のモダリティ』くろしお出版
 —— (1990) 「対話における知識管理について」『東アジアの諸言語と一般言語学』三省堂
 —— (1992) 「談話管理の標識について」『文化言語学』三省堂
- 田窪行則・金水 敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3—3

- 寺村秀夫 (1987) 「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』6-3
- 長田久男 (1984) 『国語連文論』和泉書院
- 永野 賢 (1986) 『文章論総説』朝倉書店
- 西山佑司 (1979) 「新情報・旧情報という概念について」『日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究』昭和54年度科学研究費補助金特定研究(1)研究成果報告書
- 西山佑司・上林洋二 (1985) 「談話文法は可能か」『明確で論理的な日本語の表現(最終報告)』昭和59年度文部省科学研究費補助金特定研究(1)研究成果報告書
- 仁田義雄 (1977) 「「文の文法」から「文を越える文法」へ」『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』桜楓社
- (1995) 「テキストの中の文のテンス・モダリティ」『現代日本語研究』2 大阪大学
- (1996) 「語り物のモダリティ」『阪大日本語研究』8 大阪大学
- (1998) 『日本語文法研究序説』くろしお出版
- 編 (1995) 『複文の研究(下)』くろしお出版
- 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書1「は」と「が」』くろしお出版
- 野田春美 (1997) 『日本語研究叢書9「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 橋内 武 (1999) 『ディスコース』くろしお出版
- 蓮沼昭子 (1991) 「対話における「だから」の機能」『姫路獨協大学外国語学部紀要』4 姫路獨協大学
- 島 弘巳 (1980) 「文とは何か」『日本語教育41』
- 浜田麻里 (1991) 「「デハ」の機能」『阪大日本語研究』3 大阪大学
- (1993) 「ソレガについて」『日本語国際センター紀要』3 国際交流基金日本語国際センター
- (1995a) 「トコロガとシカシ」『世界の日本語教育』5 国際交流基金日本語国際センター
- (1995b) 「いわゆる添加の接続語について」仁田編(1995)所収
- 林 四郎 (1973) 『文の姿勢の研究』明治図書
- ベケシュ=アンドレイ (1987) 『日本語研究叢書1 テキストとシンタクス』くろしお出版
- 三尾 砂 (1942) 『話言葉の文法(言葉遺篇)』帝国教育会出版部
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- (1995) 「文章・文体(理論)」『国語学の五十年』武威野書院
- メイナード泉子 (1993) 『日英語対照研究シリーズ2 会話分析』くろしお出版
- (1997) 『談話分析の可能性』くろしお出版
- 森山卓郎 (1989) 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1 大阪大学
- 安井 稔・中村順良 (1984) 『現代の英文法10 代用表現』研究社出版
- 吉田茂晃 (1987) 「ノダ形式の連文的側面」『国文学研究ノート』21 神戸大学
- Benveniste, Émile (1966) *Problèmes de Linguistique Générale*. 1 Édition Gallimard 岸本通夫監訳 (1983) 『一般言語学の諸問題』みすず書房
- Brown, Gillian & Yule, George (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge University Press
- Chafe, Wallace (1994) *Discourse, Consciousness, and Time*. The University of Chicago Press
- Clancy, Patricia. M. & Downing, Pamela (1987) "The Use of WA as a Cohesion Marker in Japanese Oral Narratives" in Hinds, J., Maynard, S. K. and Iwasaki, S. (eds.)

- Perspectives on Topicalization*. (Typological Studies in Language 14) John Benjamins de Beaugrande, Robert-Alain & Dressler, Wolfgang, U. (1981) *Introduction to Text Linguistics*. Longman
- Fauconnier, Gilles (1984) *Espaces Mentaux*. Éditions de Minuit 坂原茂他訳 (1987) 『メンタルスペース』白水社
- Firbas, Jan (1964) "On Defining the Theme in Functional Sentence Perspective," *Travaux Linguistiques de Prague*
- (1992) *Functional Sentence Perspective in Written and Spoken Communication*. Cambridge University Press
- Givón, Talmy (1983) "Topic Continuity in Spoken English" in Givón (ed. 1983)
- (ed. 1979) *Discourse and Syntax*. (Syntax and Semantics 12) Academic Press
- (ed. 1983) *Topic Continuity in Discourse*. (Typological Studies in Language 3.) John Benjamins
- Halliday, Michael, A. K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. Edward Arnold
- Halliday, Michael, A. K. & Hasan, Ruqia (1976) *Cohesion in English*. Longman
- Hopper, Paul, J. (1979) "Aspect and Foregrounding in Discourse" in Givón, Talmy (ed. 1979)
- Jakobson, Roman (1957) "Shifters and Verbal Categories" Reprinted in Waugh, Linda, R. & Monville-Burston, Monique (eds.) *On Language*. Harvard University Press
- Karmiloff-Smith, Annette (1980) "Psychological Processes Underlying Pronominalization and Non-Pronominalization in Children's Connected Discourse" *Papers from the Parasession on Pronouns and Anaphora*. Chicago Linguistic Society
- Kuno, Susumu (1987) *Functional Syntax*. The University of Chicago Press
- Leech, Geoffrey (1983) *The Principles of Pragmatics*. Longman
- Ochs, Elinor (1979) "Planned and Unplanned Discourse" in Givón, Talmy (ed. 1979)
- Schiffrin, Deborah (1987) *Discourse Markers*. (Studies in International Sociolinguistics 5) Cambridge University Press
- Stoddard, S. (1991) *Text and texture*. (Advances in Discourse Process XL) Ablex Publishing Press
- Stubbs, Michael (1983) *Discourse Analysis*. Blackwell 南出康世・内田聖二訳 (1989) 『談話分析』研究社出版
- van Dijk, Teun, A. (1979) "Pragmatic Connectives" *Journal of Pragmatics*. 3
- Weinrich, Harald (1964) *Tempus*. Kohlhammer 脇坂豊他訳 (1984) 『時制論』紀伊国屋書店
- (1976) *Sprache in Texten*. Stuttgart, Klett Verlag 脇坂豊他訳 (1984) 『言語とテキスト』紀伊国屋書店
- Widdowson, H. G. (1978) *Teaching Language as Communication*. Oxford University Press
- Yoshimoto, Kei (1986) "On Demonstratives KO/SO/A in Japanese" 『言語研究』90 (吉本啓「日本語の指示詞コソアの体系」金水・田窪編 (1992) 所収)